

うるくの歴史と文化を語る会
会報ガジャンピラ
第12号

発行：うるくの歴史と文化を語る会
 発行人：當間一郎 編集人：赤嶺和雄
 〒901-0153
 那覇市田原4-1-1 JAおきなわ小禄支店内
 TEL. (098) 857-1175 FAX. (098) 852-1486



上地 浩
(うるくの歴史と文化を語る会会員)

「大嶺ま~い」

今回の「うるくま~い」は懐かしい故里大嶺で行われた。これまで遠くから眺めるだけで、個人的に基地内への入域は至難とされた。「うるくの歴史と文化を語る会」という重々しい名称と、事務局の働きが腰の重い自衛隊を動かしたものと思う。彼の地は防衛省、国交省と二つの省庁に別れて管理されている関係で、大嶺に唯一残された「中瀬ティーラ」、そして風葬の名残がみられる上ヌ毛の靈地へ立寄ることができなかったのは残念であった。しかし、多くの皆様が大嶺に興味をもたれ参加されたものと理解し、出身者として感謝申し上げます。そこで大嶺について参考になればと書き添えます。

< 大嶺 >

大嶺は那覇市で一番の西に位置する。空港ターミナルの展望ラウンジから眺める左手前方、瀬長島より見えるところで、一時期は岩肌が露出してみえた小高い丘、今では苔もはえ昔ながらの容姿に見える。それが大嶺だ。

もともとは拾数メートルは高かったはずだが、ナイキ基地建設、飛行場の離発着の障害等々の理由で、原形を留めることなく、現況になって半世紀以上が過ぎた。かつて大嶺平野とよばれたほどの平坦地、人々は海草やウニ等が鋤込まれた肥沃な農地で稲・雑穀・野菜等を栽培し、海では魚介類等を採って生活していた。

1719年、尚敬王時代冊封副使として渡來した除藻光は、約8ヶ月の滞在期間に各地を訪問している。その一つに糸満方面への行脚がある。通堂附近から舟を出し、対岸の住吉に着く、往時の糸満街道はこの地を通過し、大嶺・豊見城と南下するのが道順であった。

その道すがら詠まれたのが、次の大嶺の詩である。

大嶺の詩

山を背にした小さな村に人が住んでいる
 一本の道が続き、かたわらには村人の家がある
 阿檀を植えて風を防ぎそれが大きく成長し村のあちこちに繁っている
 田畠は耕されているが砂まじりの土地のようだ
 海から岡へ渡る風は冷たく牛は地に臥してのんびり陽を浴びている
 潮の引いた海辺の岸にはサバニが繋がれている
 頭を回して陸の方を見ると南には石山が険しく立ちはだかって
 海から流れて来る風をそこで弱めているようだ

又、除藻光は中山傳信録の中で大嶺を次のようにも詠んでいる。

大嶺

海辺に在る、村には他の樹はなくてすべて呀咀呢^{アヅン}が茂り
 林を形成している
 村の南の岩山は絶景だ、泉があつて南に流れ
 海に注いで砂洲が出来ている
 海上一理のところに千渴がある
 そこには奇岩が多く人家はない

この詩をよむと除藻光が、大嶺の立地についてよく観察していることがうかがえる。

ところで、現在の空港用地、あれほどの農地は他では見ることが出来ない。旧小禄村は12ヶ字であった。復帰をさかいに軍用地として接收された村も、大なり小なり民間地となって世間に顔を見せるようになった。しかし、そのなかでわが大嶺は完全に基地の中に埋没してしまった。大嶺だけが。



金城清議氏の説明を聞く参加者



上ヌモーの洞窟

戦後っ子にとどまらず、昭和の15・6年生以降には、かつての大嶺は全く記憶にないという。大嶺として、色々な史料に断片的な記述はあるにはある。そこで、後輩諸君の為、故里大嶺を大嶺人の目、体感した大嶺を聞き取りで知り得た範囲で書くことが、後輩の理解の一助になればと記すことにした。

大嶺の佇まい

古くから砂上に建造物を建てるのを砂上の樓閣といつて、人々は正面に取り合わなかった。それは砂上に建てた樓閣は基礎がやわらかくて、顛覆するおそれがあることから、永続しない物事、又は実現不可能な計画のたとえに使われた言葉である。しかし、大嶺は違っていた。右をみても左をみても、どこもかしこも砂上に屋敷を構えていた。

一般的に砂は軟らかいものとの印象が強い。昨今砂浜で興じることの多いことからそれは否めないところである。しかし、砂は印象とは逆に水締めで固めると、思いのほか堅牢で海浜の埋立工事に多用されるのは、その為である。

ところで、聞くところによれば、大嶺の井戸には生活排水を流す溝ではなく、使用済の水は数メートル流れるところに吸い込まれ、普通にみられる道路脇の側溝は、大嶺ではみられなかつたという。道路は掃き清められ、屋敷囲いの福木の葉が、時に落ちているぐらいで清潔感あふれる佇まいであった。

ここに地おわり海はじまる、と言われ波濤に侵食され、切り立った南部の海岸とは大きくちがい、遠浅の海岸線は海と陸の境いめが、潮の干満で数百メートルも陸であつたり、海になつたりする。軒下は海というところも少なくなかった。

潮が干けば、そこは立派な海の畑で、人々は魚介類を採取した。潮溜には寝惚けて置き去りにされた魚が苦しそうに口を開けている。大嶺の人々は必要な時、入り用分を探る。それが海辺に生活する人の知恵で、朝げ、夕げの食卓をにぎわした。

とは言っても、海は毎日が穏やかというわけではない。時には牙をむき、白波を立て、海岸線に押し寄せる事もある。台風ともなれば、それこそ東支那海に沈んでしまうのではと思われるような、風と波で人々を恐怖に陥れた。

しかし、そこに大嶺人、永年の経験で乗り切った。防風林としての屋敷囲いのガジュマルや福木が、どの屋敷にも植栽され、襲いくる台風を跳ね返した。又、福木は夏の日ざしを遮り、木漏れ陽が降り注ぎ、人々に快適な住環境を提供した。

このような大嶺の海岸線を南下した除藻光が目にしたのは、海岸線に茂る防風林の呀咀呢（阿檀）であったろう。福木が拾数米の防風林としての高さにまで成長するには苗を植えて百年以上の歳月が要るという。それから推し量ると、除藻光が来た頃の大嶺の福木は、まだまだ小さく軒下ぐらいだったのかとも思った。しかし、それを遡ること百数拾年前、大嶺は王府からの辞令書（田名文書）にみられるように、立派な村を形成していたわけだから、除藻光がいうような呀咀呢だけの集落でなかつた事は明白である。

それに、海岸線には阿檀と並んで、旗頭の灯ろうにデザインされているユウナの木も植えられていて、四季折々に可憐な花を咲かせていた。又、砂浜にはグンバイヒルガオの蔓がはい、これも又、清楚な花をつけていた。自然が自然のままに存在し、今風に表現すればトロピカルビーチであった。今どきあれほどのビーチは沖縄のどこをさがしても、もうない。まさに価千金の世界であった。

広大な大陸の、しかも都（現在の北京）から渡來した除藻光（蘇州市出身1671年～1740年）には、中国ではみられない、青く澄んだ海、変化にとんだ大嶺の海岸に目を奪われ、内陸部分、いわゆる集落には全く興味を示さなかつたものと思われる。

故に「中山傳信録」にあのように詠んだと推測する。一人の旅人が、一部分、一方向から眺め、あるいは見落とした部分の存在を、のちの人は知らず、記述された部分が眞実と思い込むことの錯覚を心すべきと考える。それに大嶺の中央には、常緑の琉球松が茂っている上ヌ毛と呼ばれた丘陵地帯もあった。それらの琉球松や福木、ガジュマルの林も、除藻光の目に止ることもなく、あるいは記憶することもなかつたのだろう。

そのように除藻光の足跡を辿ると、遠い昔日のことが身近に感じられるから歴史は面白い。

又、夜の海辺は幻想の世界へと人々を誘う。遠くにきこえる海鳥の鳴き声、水面に照り返す月明かり、砂をかむ自らの足音、どれをとっても、すべてが別世界である。とくに、月の夜ともなれば、潮騒とともに向かいの瀬長島からは、三線の音が、高く低く南風にのって流れてくる。毛遊びへの誘いである。ニーセーター・アングワーターは、これを待っていたかのように、一人また一人と、どこからともなくあらわれ、それに負けじと呼応し、夜の更けるまで若いエネルギーを発散した。

この古くから続いた若者の宴も、風紀上問題ありと官憲の圧力が強化されると、しだいに消滅していったという。

国破れて山河すらその形を変え、地底深く埋没していった故里大嶺、昔をしのぶ縁は今は無い。平成となって式拾有余年、日々に昔日の記憶は忘却の彼方へと押しやられ、いつしか知る人が絶えるのは必定である。いずれの日か、それは古層の村として蘇る時が来るのだろうか。



大嶺海岸



津波 千恵子
(うるくの歴史と文化を語る会会員)

「第 7 回うるくまーい」で大嶺の故地を訪ねた。航空機がひっきりなしに離発着する軍民共用の那覇空港。その西側の海辺に旧大嶺の集落はあった。

どのような形で当時の姿が残されているのであろうか。普段は入れない場所だけに、興味津々。事務局から配布された資料をめくっているうちに、バスは瀬長島側のゲートから入った。

車内で金城清議さんの説明を聞きながら、海岸沿いの金網の中の道を進み、ヒージャーガー（樋川）のあった場所に着いた。小高い丘「上ヌモー」の麓にあったが、埋められてしまったらしく、今は見当たらない。ただ、元の場所の背後の斜面にヒージャーガーの碑が建てられているだけである。海岸の近くで、水は豊富に湧いていたとのことである。

碑の背後には、かつての風葬地の跡と思われる石灰岩の岩陰がある。周りには木の根が張り、蔓草などが伸びて、飛行場の中とは思えないほどである。上ヌモー周辺にあった屋敷は、残念ながらその跡すら残っていない。

海岸へ歩を進め、豊漁と航海安全を祈った「龍宮神」を訪ねる。そこにも大嶺向上会で建立した碑がある。その前で資料を基に海に関する地名の説明を聞く。クジランシー（鯨の巣）、ザングムイ（ジュゴンの籠り？）などの地名は自然の豊かさを感じさせてくれる。

大嶺の海岸は、那覇市に唯一残された広大なイノーが広がる干潟で、環境省の重要湿地500に選ばれていることを知り、正直、驚いた。かつての海の話を聞きながら、その干潟が歩けたらとも思った。

普段は入れない那覇空港の敷地内に大嶺の故地を訪ね、集落立地の様子や自然環境に触れるという有意義な体験が出来たのは、「うるくの歴史と文化を語る会」の役員・事務局の方々、および懇切丁寧にご案内いただいた金城清議さんなどの「うるく」に対する熱い思いの御陰である。心から感謝申し上げるとともに、出来るだけ早いうちに、飛行場に消えた村々を訪ねる次回以降の計画も立てて欲しいと願う次第である。



西の旗頭「順風」のトゥールーは「軍配ヒルガオ」の花
サンマーはサバニの櫂



大嶺の旗頭「順風」左側、小禄地区市民大運動会



大嶺海岸に自生する「軍配ヒルガオ」



金城清議さん、上地浩さんを囲んで交流会

大嶺の故地を訪ねて



①戦前の護岸の先に瀬長島が見える



②戦前の護岸が残っている



③戦前の護岸



④戦後の護岸の上から望む戦前の護岸

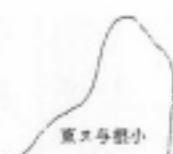


⑤戦後の護岸の上から望む戦前の護岸

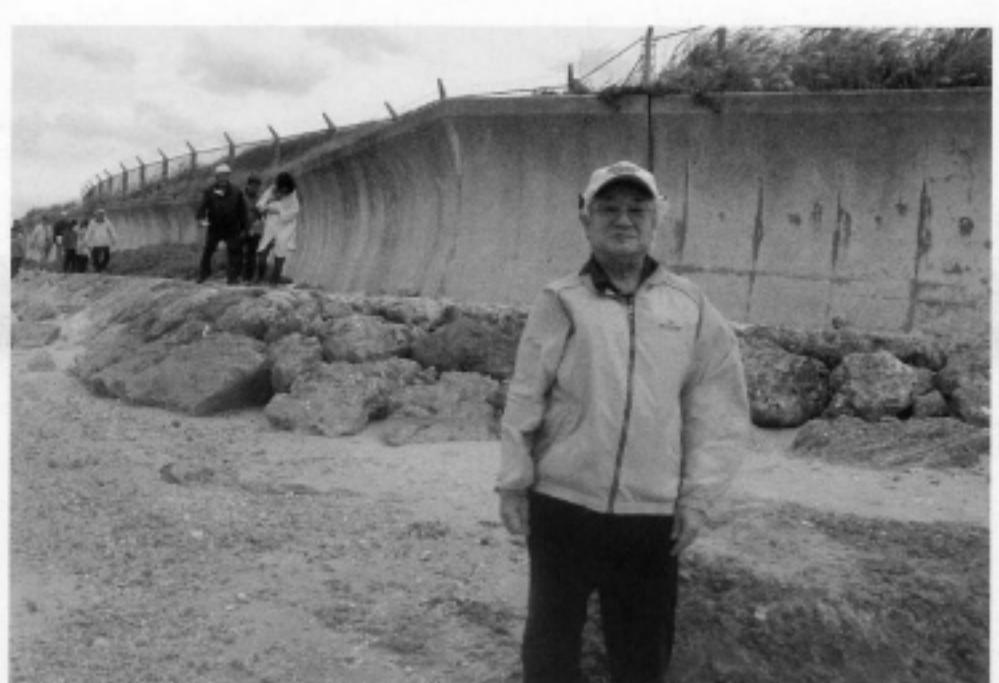
昭和16年当時の字大嶺民俗地図



この地図は、金城善吉(新後吉波駆ヌ前)、赤嶺次郎(前山城)、赤嶺三郎(沢紙)の3氏が作成した戦前の字大嶺民俗地図(昭和17~18年)を修正して、作成したものである。



(6) 戦前の護岸



(7) 戦後の高いコンクリートの護岸を望む

「消えた島…与根小」^{ユニグワ}

上地 浩

大嶺平野と呼ばれるぐらいたい広い平坦地の、海辺に面したところに小高い岩山が存在した。大きな岡（嶺）から転じて大嶺と呼ばれたのでは、と言われている。又、除藻光（蘇州市出身1671年～1740年）も大嶺の詩のなかで次のように詠んでいる。

こうべ めぐら
頭を回して陸の方を見ると南には石山が陥しく立ちはだかって

海から流れて来る風をそこで弱めているようだ

と詠んでいる

この詩で「山南の石」と言われるところが、後に大嶺人が“大城世”・“玉城世”と呼ぶようになった靈場で、大嶺人が寄りどろとする腰当となり、バックボーンであった。そこは上ヌ毛の南側で石山が陥しく立ちはだかっていた。

その石山の頂から目を西、いわゆる海に転じると、パノラマ状に広がる視界は絶景の一語に尽きる眺望であった。今でいう何々三景とか八景に匹敵する光景であった。左手にボッカリ浮いた瀬長の島は、さざ波が寄せてはかえす白砂の浜を両の手を一杯に広げているように写る。

目線を上にあげると、水平線の彼方にはケラマの島々が墨絵のように浮かんでいる。晴れた日には前島の屋並みも確認出来るほどに近くにみえた。そこには大・小の舟が行き交うのがみえ、まさにいやしの空間といえた。

足もとに目を転じると、瀬長島より南ヌ与根小、そして西ヌ与根小とつづく。西ヌ与根小は集落の目の前にあったことで、前ヌ与根小とも呼ばれていた。それより更に北の方、いわゆる右手に砂与根小が存在した。

一方、大嶺岬の突端、龍宮神の祭られている向かいの海をチーシヌ浜と言い、そこには船揚げ場があった。何艘ものサバニが、しばしの骨休めで浜辺につながれ、その間を子供達が隠れんぼや、鬼ごっこに興じている。長閑な漁人村の一時である。

台風や時化の時など、岸に打ちつける波浪の消波の役目を担っていたのが与根小で、それがなければ頑強な護岸や防潮林も、想像以上の衝撃を受け、大嶺があのようなく、穏やかな日々を送ることは至難のことであったろう。村人は三島を総称して与根小と呼んでいた。南ヌ与根小は村から離れていたのと、干潮で渡る為、潮の関係で難渉することが多く、南ヌ与根小への行き来は少なかったという。

それに引き替え、西ヌ与根小は前ヌ浜から僅かのところで簡単に渡れたとの事で、そのせいか、人々は与根小といえば、この島を指していた。島の中央部は畑になっていて、砂地に最適のスイカが栽培され、その周辺は雑木が繁り、若い男女の語らいの場であったようである。

ムラウチ
村内では逢瀬の場がない。燃える情熱の発露に洒落た喫茶店もなければこそ、若い男女の語らいの場は勢い与根小へと向かった。昨今の人々が交通機関の時刻を想定し、行動するように、かっての人は潮の干満を肌で体得しているので、時計はなくとも、月の形や位置で時を知り行動した。

島では木の葉の繁る白い砂浜、月明かりが照り返す水面、まるで幻想の世界、水面を渡る涼風に時を忘れ、近くに遠くに聞こえる潮騒、それは今も昔も変わりなく人々に訴える自然のBGMである。

昼間の仕事の疲れも何のその、我を忘れ話がはづみ、時は流れる。若い二人はあとすこし、もう一寸と帰りを先延ばしている間に潮は満ち、濡れねずみになって、家族に疑惑の目をむけられた話は枚挙にいとまない。

さて、ここで与根小という地名について考察してみた。歴史・民俗学者でおもろ、方言など多岐にわたる研究者である宮城真治先生の著書「沖縄地名考」によると『ユナ（与那・国頭村）、ユニ（与根・小禄村の小字）、ウンヌ（与論・大島郡）は同一の地名で、ユナ・ユニはユリ（寄）であり、風波のために寄り上げた砂地を意味する』と記されている。

一方、一副の名画を愛でるような、あの長閑な風景を一変させたのは、あの戦である。山河を破壊しつくした揚句の果て、新たな基地建設の名の下に、安上がりの工事の為、海浜の砂の採取を始めた。

世の移ろいにも動じず、琉球の邦開闢以来、泰然自若として悠久の流れに身を置いた三つの与根小も、真夏の炎天下にさらされた氷塊の解けるが如くに、あれよあれよという間にその姿を消していったという。島全体が砂で出来ていたとみえ、消えた跡には堡礁もなく、一掘の砂さえ残されない、淋しい荒涼とした浜と化した。

この与根小についての記録が大嶺は勿論、国土地理院にも残されてない。故に島の面積、形状等は全く不明である。

あれから半世紀余がすぎ、ようやく自然が蘇る兆しがみえてきた。浜には、モズク・アーサ等が昔ほどではないが自生し、時期になると結構採れるようになった。教育関係者は、市内に残された唯一の自然で手つかずの海として、子等の自然学習の場としている。

しかし、それさえも危うくなってしまった。那覇空港に第二の滑走路の問題が浮上し、進行している。大嶺は常に国策とやらの大規模な渦にのみ込まれ、翻弄される。



第 7 回うるくまーい (大嶺まーい) 参加者。龍宮の石碑を囲んで。



戦前の護岸が残っている。右は戦後のコンクリート護岸。



①貸切大型バスで戦前の大嶺部落を訪ねる



②金城清議氏の説明を聞く参加者



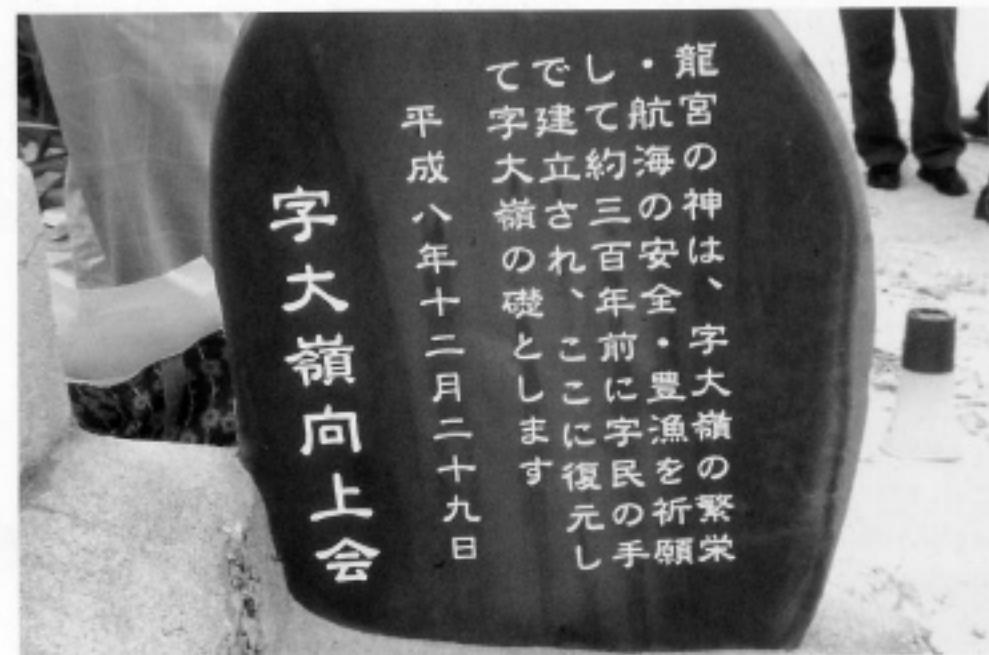
③水神・ヒージャー川の石碑



④上ヌモーの洞窟



⑤龍宮の石碑を囲んで



⑥龍宮の石碑



⑦説明を聞く参加者、後方に戦前の護岸が見える



⑧金城清義民説明を聞く参加者、戦前の護岸が見える